

温故知新⑭

今を去る事、約半世紀前、私が造園の世界に入った頃はまだランドスケープと言う概念は浸透しておらず、従って資料も本屋には無く、図面を描くにも土木の本を参考に詳細図を描くという有様でした。

デザインということについてもまだ黎明期であり、それだけに我々は造園におけるデザイン、使用する素材等について良く議論を致しました。例えば誰かが見てきた東京のホテルの庭が素晴らしい、水や石の扱いが良かった、目で見た感じがどうか今のように瞬時にインターネットで見ることの出来ない分、自分達の感覚を総動員して互いに意見を交換し合い、良し悪しの判断をしたものでした。私自身も上京の折には必ず時間を取り実際に見てスケッチをし、実測し、それを図面に起こすということをしたものでした。その当時は寝ても覚めてもデザインについて、その良し悪しを考えていました。機能的な条件を満たした上で「美しい空間」を創りたい、美しい空間とはどういうものなのか、より美しく見える為にはどうすれば良いのか、検討に検討を重ねた上で計画したものでした。今でも一つの事案に対して100通りの案を思い描くことは出来るが、その中からこの場所にはこれが一番相応しいという結論に達してからでなければ図面を描くことは致しません。先に鉛筆を動かしてゆくと、図面を埋めて行くと言う作業になってしまい、結果図面上の景色でしか有り得無く、人を感動させることは難しいからです。

この道を目指す人には、美しい空間とはどういうものであるか、そういうものを自分は創りたいのだという志を持ってデザインして欲しいのです。

例を挙げると公共の公園の場合、理論的に良く説明され、機能的に上手くいっていてもデザインの的に無理があったり、居心地が悪かったりして美しいと感じる事が少ないのは何故でしょう。デザインと言うものに心を掛けて、機能以上のものをそこに求める志が必要ではないでしょうか。

「センスが悪けりゃ理屈をこねても意味が無い。」と聞いたことがあります。日頃から美しいと感じる心と目を養うこと、美しいと感じたらそれは何故なのかと疑問を持ち、その根拠を探して確認する。そういう訓練を通してセンスを養う必要性に気付くことも大切です。

更に「神はディティールに宿る」と言う言葉がありますが、ディティールをきっちり納めることが出来なければ見る人に美しく感じさせることは出来ません。技術を習得して細部の納まりをきっちり設計監理することも大切です。

「センスを養い、ディティールを究める」、このことを常に念頭において私は美しい空間創りの為業務に努めています。

柳原 寿夫

株式会社 スタジオアーバンスペースアート代表取締役
1942年生まれ 登録ランドスケープアーキテクト(RLA)

株式会社 荒木造園設計事務所を経て、
1990年株式会社 スタジオアーバンスペースアート設立
現在に至る

